

各論

各論では各種弁証の具体的な内容について解説する。中医弁証の内容は非常に幅広く、また相互に重なりあっている部分もある。そこで、各項では段階的に内容を深化させていくという形式で、初学者が学びやすいように構成に工夫を凝らした。また八綱弁証については、弁証の綱領であるためその理論について総論で解説したが、さらに各論のなかでもふれる必要があるので、気血陰陽・病性・病位の各章のなかでも再度論及している。

病邪弁証には外邪によるものと内生邪によるものがある。各論では寒邪・熱邪・風邪・湿邪・燥邪・暑邪・瘀血・痰・飲・水気の10種類に分けて解説した。

気血陰陽弁証については気血病証の論述にとどまらず、さらに陰虚・陽虚・亡陰・亡陽についても論及し、気血陰陽の盛衰と、その変化について、全面的に認識できるように解説した。

病性弁証には寒証と熱証・虚証と実証・陰証と陽証の弁証がある。これらの具体的な弁証と綱領的理論については、各弁証の区別と関連について解説した。

第1章 病邪弁証

病位弁証では表裏弁証について説明し、さらに上・中・下の弁証、特殊部位の弁証などについても論及することにより、その内容を充実させた。

臓腑弁証では肝・心・脾・肺・腎について説明し、腑については表裏の関係にある臓と関連させて解説した。臓腑弁証は、病邪・気血陰陽・病性・病位などを総合的に判断していくものであり、内容は豊富かつ複雑である。

経絡弁証では十二経脈証候と奇経八脈証候について解説した。

六経弁証・衛氣營血弁証・三焦弁証には、陰陽・気血・臓腑・経絡・病邪など多くの内容が含まれており、これもまた総合的な弁証となっている。これらは外感熱病に適応するだけでなく、内傷雜病の弁証における指針ともなる。

病邪弁証は、「審証求因」の内容の1つである。証候には、すべて一定の原因がある。したがって証候を弁証していくことにより、その病因をつきとめることができる。病因の範囲は非常に広く、六淫・七情・飲食・労逸・虫毒および内生諸邪などにとどまらず、さらに体質・人間関係などの因子とも関係する。病邪は病因の1つととらえられる。本章では病邪弁証の重要な内容である風・寒・暑・湿・燥・熱・瘀血・痰飲・水気の弁証について、それぞれ解説していく。

第1節 寒邪弁証

寒邪は六淫の1つである。寒邪は陰邪であり、その性は「清冷」である。特徴としては陽気を損傷しやすいため、これを受けると人体には畏寒や厥冷が現れやすい。また寒邪には取引性・凝滯性があり、気血の運行を阻害しやすいので、拘急や疼痛が現れるケースが多い。外感の寒邪が肌表に影響し、衛陽が抑止され閉塞すると寒邪在表証となる。また寒邪が臓腑に直中すると寒邪入裏証となる。さらに寒邪が経脈に侵襲し、気血が抑止され閉塞すると痛痺証となる。

1 寒邪在表証

本証は人体が寒気を受けることにより起こる証候である。傷寒ともいう。本証は冬季に多くみられる。ただし、気候の異常などの要因がある場合には、他の季節にみられることもある。寒邪が肌表に侵襲し、そのために衛気が抑止されて腠理が閉塞すると、玄府（汗孔・汗腺）は通じなくなる。本証は多

くの場合、発病初期に現れ、病位は表にあり、性質は寒に属している。正気が体表で邪気に抗しているので実証に属している。

【主症】 発熱・悪寒・無汗

【症状・所見】

- ①発熱・悪寒・無汗
- ②頭痛・身体痛
- ③鼻閉・咳嗽・気喘
- ④舌苔薄白・脈浮緊

【証状分析】

- ①寒邪が表に影響して衛気が抑止され、正気が肌表で邪気と抗争すると発熱・悪寒が起こる。また腠理が閉塞するので無汗となる。
- ②寒邪が脈絡を阻滞させると頭痛・身体痛が起こる。
- ③肺は皮毛に合しており、皮毛が邪を受け肺気が失宣すると鼻閉・咳嗽・気喘が起こる。
- ④病証の性質が寒で邪が表にある場合には、脈は浮緊、舌苔は薄白となる。

【本証の進行と影響】

1. 寒邪が肌表に鬱して熱化すると表熱証となる。また次第に裏に入ると表寒裏熱証や邪熱壅肺証、またはその他の裏熱証となる。
2. 寒邪が絡脈から経脈に入り、隧道に凝結すると痛痺証となる。
3. 寒邪が裏に入り陽気を損傷すると、裏虚寒または裏寒などの証になる。
4. 表寒証は病状は軽く病位は浅いが、適切に対応せず邪が解表しないと多くの変証を引き起こす。

【鑑別ポイント】

1. 本証と表熱証との鑑別

表熱証の場合は悪寒は軽いが、本証では悪寒が顕著である。また表熱証には軽度の口渴または咽頭痛がみられるが、本証にはこれらはみられない。表熱証の舌苔は薄であるが舌辺や舌尖は紅となる。一方、本証では舌苔は薄白で、舌質は正常である場合が多い。

2. 本証と風寒証との鑑別

一般的には風寒証では悪寒は軽く悪風をとめない、身体痛も軽度で、有汗で脈は浮緩を呈する。

【弁証ポイント】

1. 主症と舌象を把握すれば本証を確定することができる。
2. 季節的な要素を軽視することはできない。一般的には冬季に多くみられる。
3. 本証は発病初期に現れる。

2 寒邪入裏証

本証は寒邪が直中して起こる証候である。すなわち表を経由せず寒邪が裏に入り脾胃を損傷して発病するものである。寒邪がかなり強いと裏に直中するが、寒邪の強弱によらず、中陽が弱っているために直中する場合も多い。裏寒証の病位は裏であり、性質は寒に属している。これは正邪が裏において抗争しているものであり、正虚の要素もなくはないが、病変は一般的には実証に属している。本節で述べる裏寒証は、臨床上、最もよくみられる証候の1つである。広義の裏寒証には単純な胃寒証・寒邪直中による少陰証などが含まれるが、これらについては関連する節で述べる。

【主症】 腹痛・腹鳴・泄瀉（水様便）

【症状・所見】

- ①腹脹・腹部が冷えて痛む
- ②腹鳴・泄瀉・悪心・嘔吐
- ③食欲不振
- ④舌質淡または淡胖・舌苔薄白・脈沈緊

【証状分析】

- ①寒邪が直中して脾胃を損傷し、寒邪が陰絡に凝結して気機不利になると腹脹や腹部が冷えて痛むなどの症状が起こる。
- ②寒邪が裏にあるために脾胃の昇降が失調すると腹鳴・泄瀉・悪心、さらに嘔吐が起こる。
- ③胃の受納機能が低下し、脾の運化機能が失調すると食欲不振となる。
- ④舌質淡・舌苔薄白・脈沈緊は裏寒の象である。またこの場合の舌胖は、脾胃が平素から虚している現れである。

【本証の進行と影響】

1. 本証がさらに進行すると脾胃陽虚証となる。

2. 本証が長期にわたって改善されないと脾胃気虚証となるケースもある。さらに進行すると脾胃陽虚証またはその他の臓腑の虚寒証となる。
3. 寒邪が長期にわたって停滞し、次第に熱化して寒熱挟雜証または裏熱証となるケースもある。

【鑑別ポイント】

1. 本証と脾陽虚証との鑑別

脾陽虚証では緩慢に発症する事例が多いが、本証は急性である場合が多い。また脾陽虚証の腹痛は比較的軽く、四肢不温または全身の浮腫をともなうが、本証は腹中冷痛が主たる症状となる。脾陽虚証の脈は沈遅無力であるが、本証の脈は沈緊有力となる。脾陽虚証は虚がベースにあって寒象をともなうのに対し、本証は裏寒が主であり実証に属している。

2. 本証と表寒証との鑑別

両者には表裏の区別があるので容易に鑑別できる。ただしこの2証は併発することがある。

【弁証ポイント】

急性の脾胃昇降失調が本証の審証基礎となっている。

1. 主症が急性によるものであれば、本証と決定することができる。
2. 本証は発病初期に多くみられ、症状は温めると軽減し、冷やすと増強する特徴がある。

第2節

熱邪弁証

熱邪は温邪・火邪を含み、温熱の性質をもつ外来の病邪である。熱は陽邪であり、焼灼性があり、陰液を損傷しやすい。これを受けると多くの場合、人体には高热・悪熱・口渴などの熱盛傷陰による症状が現れる。また火熱には炎上性があるので面赤（顔面紅潮）・目赤（目の充血）・頭部の熱痛・口舌のびらんといったように、人体上部に症状が現れやすい。さらに火熱は迫血妄行を起しやすいため、吐衄・血便・崩漏・斑疹などを引き起こす。火熱が営血に入ったり、局部に作用すると癰腫を引き起こす。液に作用して痰を形成し、痰熱となって心竅に影響すると意識障害・譫語・狂躁などが起こ

る。また肝経に影響して熱盛動風となると痙厥などの症状が起こる。

熱邪弁証の内容は非常に幅広いが、ここでは表熱証・裏熱証・寒熱錯雜証・熱入心包証・熱盛生風証について解説する。また陰虚内熱については陰陽気血弁証の章で論及し、心火上炎証・肝火上炎証などについては臟腑弁証の章で解説することとする。

1 表熱証

表熱証は熱邪が衛表に侵襲して起こる証候である。発病初期に多くみられ、病位は表にあり性質は熱に属している。正気はまだ盛んであり、病証は実証に属している。

【主症】 発熱・軽度の悪風悪寒・軽度の口渴

【症状・所見】

- ①発熱・軽度の悪風悪寒・軽度の口渴
- ②無汗または少汗
- ③頭痛・咳嗽・咽頭痛
- ④舌辺舌尖紅・舌苔薄白・脈浮数

【証状分析】

- ①熱邪が衛表に侵襲して衛気と抗争し、衛陽が鬱すると発熱が起こる。また衛気が抑止され肌表をうまく温煦できないと軽度の悪風悪寒が起こる。
- ②温熱の邪は津液を損傷しやすいので、発病初期には軽度の口渴が起こる。
- ③邪が肌表にあるために腠理の開閉が失調すると、無汗または少汗となる。
- ④舌辺舌尖紅・舌苔薄白・脈浮数は表熱証の象である。

【本証の進行と影響】

1. 本証が改善されず、邪熱が裏に入ると裏熱証となる。
2. 熱擾胸膈・邪熱壅肺・胃熱亢盛・腸胃熱実・熱入心包などは、熱邪が侵入した部位により、異なった現れを示す証である。
3. 病邪が長期にわたって留まり、津液を損傷すると肺胃津傷証をひき起こす。

【鑑別ポイント】

1. 本証と表寒証との鑑別

本証と表寒証は、ともに邪が肌表にある証であるため、症状・所見も類似